

大阪狭山市文化財報告書22

大阪狭山市内遺跡群 発掘調査概要報告書11



平成13年(2001年)3月
大阪狭山市教育委員会

大阪狭山市文化財報告書22

大阪狭山市内遺跡群 発掘調査概要報告書11

平成13年(2001年)3月
大阪狭山市教育委員会

序 文

大阪狭山市には、大阪府の史跡名勝に指定されております狭山池をはじめとして多くの文化財があります。狭山池ではダム化に伴う発掘調査によって多くの遺跡、遺構が出土し、この28日にはその成果を展示した大阪府立狭山池博物館がオープンいたしました。

このような調査と併行いたしまして、本市の教育委員会では平成2年度より個人住宅等の建築に伴う発掘調査を継続的に実施してまいりました。本年度は狭山藩陣屋跡を中心とした調査を実施し、貴重な成果を得ることができました。本報告はこれらの調査結果をまとめたものです。本書が地域の歴史を探る小さな足掛かりとなれば幸いです。

調査にあたりましては、建設主の皆様ならびに周辺の皆様に多くのご協力を賜り、厚く感謝いたします。

今後とも本市の文化財保護行政に対するご理解とご支援のほどをよろしくお願いいたします。

平成13年(2001年)3月

大阪狭山市教育委員会

教育長 澤 田 宗 和

例　　言

1. 本書は国庫の補助を受け、大阪狭山市教育委員会が平成12年度事業として大阪狭山市内で実施した個人住宅建築等に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査の結果をまとめた概要報告書である。
2. 本書に収録した調査は以下の通りである。
 - 1 狹山藩陣屋跡 00-1区、00-2区、00-3区、00-4区、00-5区、
00-6区
 - 2 新池遺跡 00-1区
3. 現地調査は大阪狭山市教育委員会生涯学習推進課市川秀之が担当し、同課谷義浩がこれを補佐した。現地調査にあたっては正名直方、鳥山文夫、米澤孝成ら各氏のご協力を得た。
4. 内業作業については市川秀之が担当し、若宮美佐、橋本和美、笹岡裕里子、笹岡晴美ら各氏の協力を得た。遺物の写真撮影は阿南写真工房に依頼した。
5. 本書の執筆・編集は市川秀之が担当した。

本　　目　　次

序　　文	大阪狭山市教育委員会	澤田宗和
例　　言		
は　じ　め　に		1
1. 狹山藩陣屋跡	00-1区	3
	00-2区	11
	00-3区	16
	00-4区	17
	00-5区	17
	00-6区	18
2. 新池遺跡	00-1区	21
3. ま　と　め		21

はじめに

大阪狭山市では昭和40年代以降に急激な人口増加が生じ、丘陵部を中心に住宅開発が進んだ。近年においてはその頃の勢いは衰えたものの、小規模な開発はなお盛んである。また近年では当時に新築された木造住宅が増改築の時期にさしかかっており、これらに伴う埋蔵文化財の発掘届提出数はここ一、二年微増の傾向にある。特にここ数年は狭山藩陣屋跡において府道の歩道設置事業が行われていることの影響もあって、その周辺において建て替え、新築などが多く行われ、それに伴う発掘調査が本市における発掘の中心となっている。

本調査報告書においては平成12年度に大阪狭山市教育委員会が実施した市内の遺跡における個人住宅建設等にともなう発掘調査の成果を掲載している。ただし狭山ニュータウンなどすでに大規模な造成工事がおこなわれた箇所については、住宅の新築、増築に際しては、基礎掘削時の立会調査を実施している。事前調査や立会調査の結果、遺構、遺物が検出されなかった事例も多くみられたが、これらについては報告を省略する。

大阪狭山市内の遺跡分布および地形分類は図1に示す通りである。大阪狭山市内は西側の泉州北丘陵と東側の羽曳野丘陵に挟まれた地形で、この両丘陵の間にいく筋かの南北方向の谷筋が走っている。これらの谷筋から旧石器時代、縄文時代の打製石器がいくつか発見されている。

(上野正和「狭山の考古学研究と私」『さやま誌 大阪狭山市文化財紀要』創刊号 1992)。弥生時代の遺跡としては、市域南部の高地において弥生時代後期の集落跡が検出された茱萸木遺跡がわずかに知られているだけである。古墳時代前期については古墳はこれまでまったく検出されていないが、ただ狭山池北側の池尻遺跡において庄内期のものと思われる遺構が確認されており、また狭山神社遺跡でも当該時期の遺物が検出されていることから、沖積面における遺跡の分布が予想される(『狭山池』埋蔵文化財編 狹山池調査事務所 1998)。古墳時代中期になると、泉州北丘陵を中心にその操業が展開された陶邑窯跡群が東側にその領域を拡大した結果、本市域の西端にあたる陶器山丘陵とその北側に広がる高位段丘の斜面に須恵器窯が作られるようになった。古墳時代後期の6世紀中葉から後期になると、陶邑窯跡群はさらに東方へと展開し、本市域のほぼ全体にわたって広がる中位段丘の崖や開析谷の斜面を利用して窯を築き、須恵器生産を行うようになった。7世紀代以降次第に窯の数は減少し、8世紀にはいるとほとんどみられなくなっていく。また後期の古墳として山本地区に狐塚古墳が存在している。

本市域の中央に所在する巨大な溜池、狭山池の築造については古くから多くの議論があったが、狭山池ダム化工事に伴って狭山池調査事務所が実施した発掘調査によって、その年代は7世紀初頭であることが明らかになってきた。一連の発掘調査によって狭山池内からは中樋遺構、東樋遺構、西樋遺構、木製枠工などさまざまな遺構がつきつぎと発見され、狭山地域の歴史像は豊かさを増すこととなった(『狭山池』埋蔵文化財編 狹山池調査事務所 1998)。狭山池が築かれた西除川(旧天野川)に沿った大きな谷の東西に広がる中位段丘上には、東野庵寺、池尻城跡、庄司庵遺跡、狭山神社遺跡、狭山藩陣屋跡などの古代、中世、近世の諸遺跡が分布して

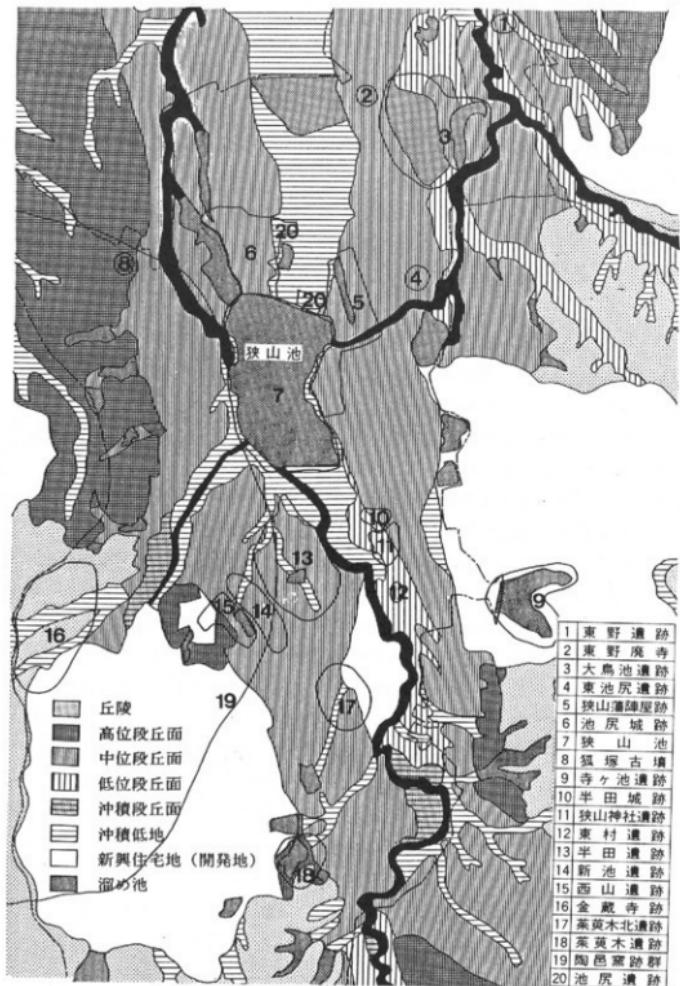


図1 大阪狭山市内の遺跡分布と地形分類

いる。東野庵寺は出土する瓦から7世紀の後半に創建されたと思われる寺院で、周辺からは奈良時代の火葬墓も出土している。庄司庵遺跡は近年新規発見された遺跡で中世の遺物が検出されている。また狭山神社遺跡は本殿前面の沖積面において古墳時代の遺物が検出されているほか、本殿背後の段丘面上には「コ」の字型にまわる土壘が残存しており、中世の城館が存在した可能性がある。また狭山池の北西に所在する池尻城跡も南北朝期の城館で1985年に大阪府教育委員会によって大規模な発掘調査が実施されている。

1. 狹山藩陣屋跡

狭山藩陣屋跡は、狭山池東側の中位段丘上に立地する近世の城館跡である。豊臣秀吉によつて小田原城を落とされた戦国大名北条氏の末裔が、近世初期にこの地に陣屋を開き、以後明治維新に至までの間、一貫して陣屋が営まれていた。陣屋は北側の上屋敷と南側の下屋敷に分かれているが、御殿は上屋敷のもっとも北に設けられ、その周辺に上層の武士の屋敷が建ち、上屋敷の外周部や下屋敷には下層の武士団が居住した。また下屋敷は狭山池に面した景勝の地であり、そこに藩主の別邸が建てられていた。



図2 狹山藩陣屋跡調査区位置図 (S=1/4000)

明治以後、狭山藩陣屋跡の景観は大きく変化し、現在ではほぼ全域が住宅地となっている。最近では既存住宅の建て替えや、小規模な開発、道路工事などが頻繁に発生し、それに伴って発掘調査の数も増加している。いずれも小規模な調査であるが、その成果の蓄積によって狭山藩陣屋の構造は次第に明瞭なものとなりつつある。また下屋敷はその敷地の大半が最近まで南海さやま遊園地となっていたが、2000年3月に遊園地が廃園となり、今後は開発が予想されている。

これまでの調査では、上屋敷の北部、御殿の周辺においては上下2面の遺構面があり、下面是天明年間の火災以前の遺構面、上面はそれ以降のものであることが推測されている。

今年度は発掘調査がこの狭山藩陣屋跡に集中し、00-1区・00-2区・00-3区・00-4区・00-5区・00-6区の成果を本書に掲載している。なお00-1区については本書には概要のみを掲載し別に報告書を刊行している（大阪狭山市文化財報告書21 2001）。

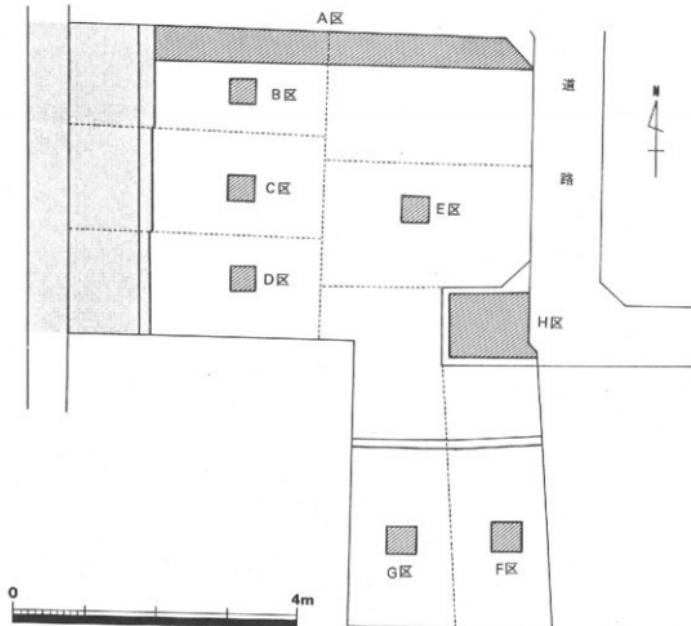


図3 狹山藩陣屋跡00-1区調査区位置図 ($S=1/200$)

①00-1区

狹山四丁目に所在する。この場所は藩主が居住した御殿とは大手筋（現在の府道美原河内長野線）をはさんで向かい側にあたり、幕末の状況を示す「狹山藩陣屋上屋敷絵図」（都築家所蔵）によれば家老などを勤めた井出家の屋敷地となっている。

建築は現状地盤の上にさらに盛土を施す設計であったため、既存の周辺地での調査の成果から考えて、住宅基礎の遺構面に対する直接的な影響は少ないと考えられた。そこで深く掘削される擁壁基礎部分（A区）および埋設物が予定されている道路部分（H区）についてはすべて発掘調査を実施し、住宅建築予定地についてはそれぞれ2m四方の調査区（B～G）を設定し、遺構の概要を把握することとした。

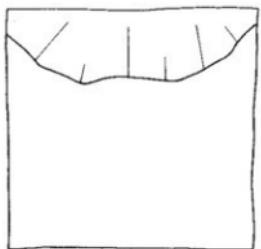
（A区）調査区の北側の道路にそって設けられる擁壁の基礎部分がA区である。幅1.5m、長さ27mについて調査を実施したが、この場所はもともと敷地の北端にあたっていたために埋設管などが入っており、擾乱が著しく遺構、遺物などは検出できなかった。

（B区）今回の調査区の周辺ではこれまで大阪狭山市教育委員会によって幾度も発掘調査が実施されているが、その結果現在の地面より20～30cm下に第1遺構面が存在することが判明している。しかしながら本調査区は、以前から駐車場として利用されていたためにその造成工事のために西よりのB区、C区、D区については第1遺構面がすでに削平されており、検出することができなかった。第2遺構面は現状地盤よりも50cm下がった場所で検出された。調査区の北側において落ち込み状の土坑が検出されている。径や形態はこの土坑が調査区よりもはるかに大きいため不明である。深さはもっとも深い箇所で30cmであるがこれも調査区外ではさらに深いことが予想される。埋土は青灰色のシルトであり、小規模な溜池として利用されていたものと思われる。このほかに遺構はなく、また遺物も検出していない。

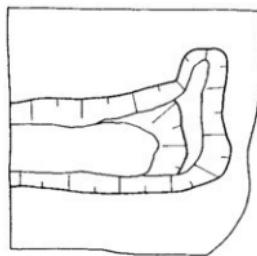
（C区）C区においても他区の第1遺構面に対応する面は検出できず、現状地盤より40cm下がった場所で第2遺構面を検出した。遺構として調査区のほぼ中央を東西にながれる溝を検出した。この溝は幅80cm、長さは調査区内において180cm。東端はやや北側に屈曲して終っている。深さは調査区西端の一一番深い部分で55cmであるが、屈曲部付近では浅くなつており30cm程度となっている。内からは瓦片や染付碗などが検出されている。

（D区）B、C区同様に第1遺構面に対応する面は検出できず、現状地盤よりも30cm下で第2遺構面を検出した。この面においては溝1条と土坑1基を検出した。溝は調査区の西端を南北に流れるが、溝の西側の肩は調査区外であり、幅や長さ、正確な方向は不明である。深さはもっとも深い北端の部分で43cmであり、調査区内でみるとかぎり溝の底は南から北にわずかに傾斜している。土坑は溝も少し東側にあり、直径は60cm、深さは35cmであった。これらの遺構の中からは遺物は検出されていないが、遺構面検出のための掘削中に瓦片が少数出土している。

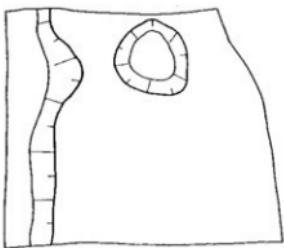
（E区）E区は調査区全体の東よりの場所に所在している。現状地盤を35cm掘削した場所で第1遺構を検出した。この遺構面においては不整形の落ち込み状の土坑を検出している。



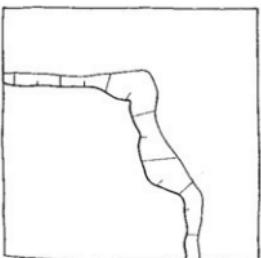
① B区第2面平面図



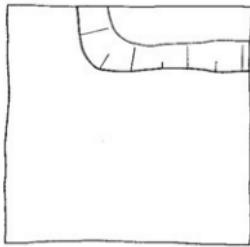
② C区第2面平面図



③ D区第2面平面図



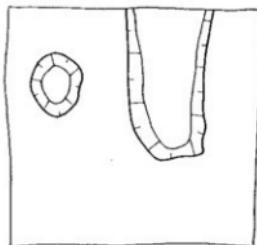
④ E区第1面平面図



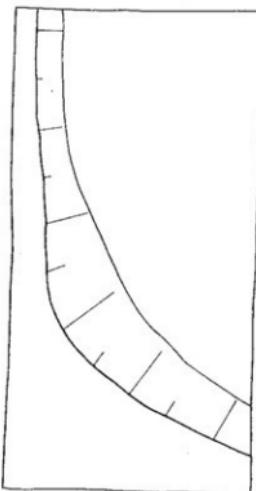
⑤ E区第2面平面図



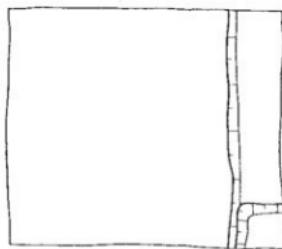
図4 狹山藩陣屋跡00-1区 遺構平面図(1) (S=1・40)



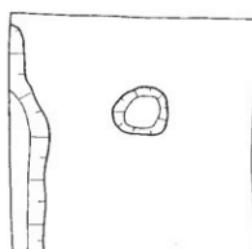
⑥ F区第1面平面図 ($S = 1/20$)



⑦ F区第2面平面図 ($S = 1/20$)



⑧ G区第1面平面図 ($S = 1/20$)



⑨ G区第2面平面図 ($S = 1/20$)



図5 狹山藩陣屋跡 00-1区 遺構平面図 (2) ($S = 1/40$)

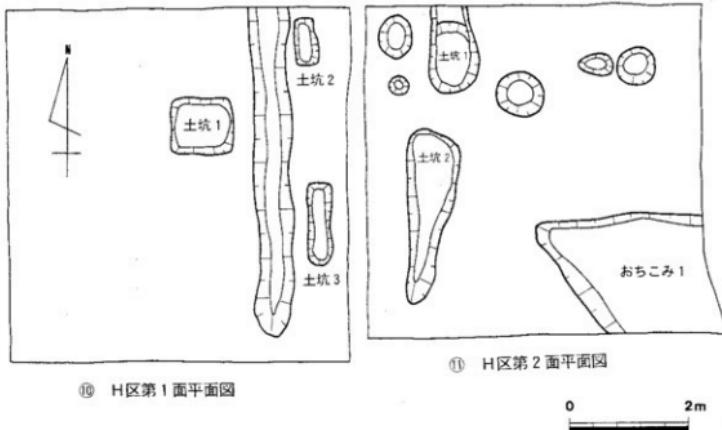


図6 狹山藩陣屋跡00-1区 遺構平面図(3) ($S=1/40$)

この土坑は調査区内では北側を底にした逆L字型であるが、調査区の外に大きく広がっており、全体の形はまったく不明である。深さはもっとも深い場所で25cmである。土坑の中からは大量の瓦片が検出されており、瓦を投棄する目的で掘削された土坑であると考えられる。第1遺構面からさらに40cm下で第2遺構面を検出した。この面においては北端で土坑1基を検出している。この土坑は調査区において東西140cm、南北56cmの方形を示しているが、大きく調査区外に広がっており全体の形態は不明である。深さは最大で28cm。埋土中より瓦片が検出されている。

(F区) 2000-1区の全体の形は北を底辺としたL字型であるが、F区は南に突出した部分の東南隅に所在している。現状地盤より10cm下で、第1遺構面を検出した。この面では溝1条と土坑1基を検出した。土坑はやや南北に長い楕円形で、南北長50cm、東西42cmである。深さは18cm。また溝は南北報告に走っており、調査区内での長さは128cm、最大幅70cm。深さは5cmという非常に浅い溝である。第1遺構面の調査を終ってさらに掘削を行ったところ25cm下がった場所で第2遺構面を検出した。ところが調査区が狭いためにほぼ全域が大きな土坑の内部に含まれてしまったので、調査区をさらに南側に2m拡大することとした。土坑の大きさは調査区内において南北370cm、東西180cmであるが、さらに大きく広がっている。深さは最大で40cmで、埋土内から多量の瓦片、染付などの遺物が出土している。埋土の内部には炭化物も多く含まれており火災のあとで瓦などを投棄する目的で掘られた土坑と思われる。

(G区) G区は南側に張り出した調査区の南西隅に所在している。現状は畠であったので15cmの厚さの耕土をすきとり、そこからさらに8cm程度掘削した場所で第1遺構面を検出した。この面では溝1条を検出している。溝は調査区の東端南北に走っているが、北端、南端、東肩は

いずれも調査区の外であり、規模は不明である。南端が少し深くなっているがその箇所においても深さは15cmという浅い溝である。この遺構面からはほとんど遺物は検出されていない。この面からさらに25cm下がった場所で第2遺構面を検出した。この遺構面でも溝1条と土坑1基を検出した。溝は調査区の西端を南北に走っているが南端は調査区外である。調査区内において長さは190cm、幅は35cm、深さは20cm。土坑は調査区のはば中央に所在し、直径45cm、深さ25cmである。この遺構面でも遺物の検出はみられなかった。

(H区) 調査区全体の東端において予定されている道路部分に、H区として南北600cm東西550cmの調査区を設定した。現状地盤より30cm下で第1遺構面を検出した。この遺構面においては東端で溝1条、土坑3基を検出している。溝は調査区の北側にさらに延びており調査区内において長さ556cm、最大幅35cm、深さは最大でも15cmという浅い溝である。土坑1は南北46cm・東西50cmの方形で、深さは20cmである。土坑2は南北40cm・東西18cmの溝状の遺構で深さは5cm、土坑3は南北70cm・東西20cm。やはり深さは5cmであった。土坑2・3は溝にほぼ平行に位置している。第1遺構面からさらに30cm下に第2遺構面が所在した。調査区の南東隅には落ち込み状の遺構があった。調査区内において東西280cm、南北105cmの不整形の遺構で、深さは最大で20m、染付碗などが出土している。土坑1は調査区外に延びる溝状の土坑で、調査区内において南北150cm、東西90cmである。南端が少し深くなってしまっておりその部分で深さ25cmであった。土坑1のすぐ南に土坑2があるが方向はやや南端が西側に振っており完全に南北方向というわけではない。南北290cm・東西90cm、深さ8cmの浅い溝である。土坑1を挟んで東西方向にビットが5基並ぶが、明確な規則性はみられずその性格は不明である。

(遺物) 狹山藩陣屋跡00-1区から出土した遺物は大半が第2遺構面の遺物であった。第1遺構面の遺物は細片が多く、図化できたのはすべて第2遺構面から出土した遺物である。產地としてもっと多いのは肥前系のものであるが、時代的には大橋康二氏の肥前磁器編年の第IV期(1690~1780)のものが多い。唐津はまったく見られず磁器のみである。「寿」字ちらしや見込み五弁花のように18世紀の作風をしめすものが多い。

陶器としては土鍋(瀬戸美濃系)、茶碗(産地不明)、土瓶(瀬戸美濃系)などが出土している。摺鉢は備前、堺産のものがある。またミニチュアの摺鉢である土製品もいくつか出土している。

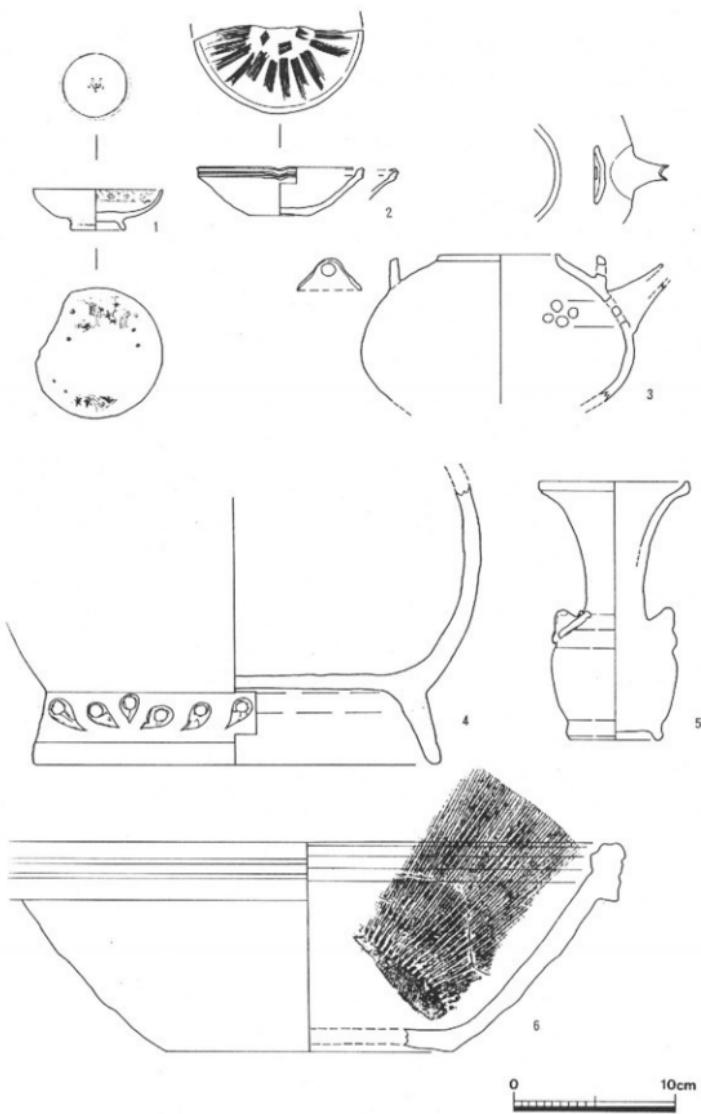


图7 狹山藩陣屋跡 00-1区出土遺物

②00-2区

狭山三丁目に所在する。00-2区、00-3区、00-4区は順に西から東に連続する3筆書きの敷地である。この場所は明治時代に近世末期の状況を復元的に描いた『狭山藩上屋敷絵図』によれば、藩主が居住する「御殿」に南接する「広場」の位置にあたっている。

3筆のうち一番西側の00-2区では、建築の規模にあわせて東西7.8m、南北6mの調査区を設定した。現状の地盤を20cm掘り下げたところで褐茶色土からなる層を検出し、さらにこの層（厚さ20~30cm）を除去したところ茶黄色粘土の地山層を検出した。00-2区周辺ではこれまで多くの発掘調査を実施しているが、いずれも上下2面の遺構面を確認している。00-2区については地山面一面のみしか遺構面が存在しなかったこととなる。おそらくは既存建物の建築に伴う造成によって上面は削平されたものと思われる。なお00-4区の東隣では府道の歩道設

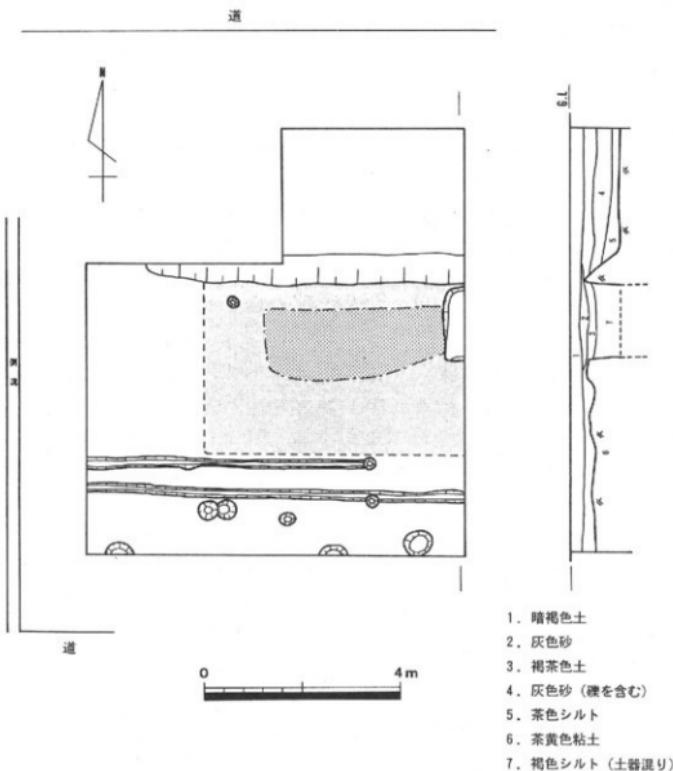


図8 狹山藩陣屋跡00-2区 平断面図 ($S=1/80$)

に伴ってすでに発掘調査が実施されているが、この箇所においても同様に遺構面は1面しか検出されていない。

遺構としては北側で堀状の掘り込みを検出したほか井戸、土坑、東西方向の溝などを検出している。

堀は調査区内において東西6.6m、南北3.2mを計る。堀の南岸は調査区の西側でやや北側に屈曲しており、この付近がこの堀の西端であると思われる。また堀は東側にさらに延びており東接する0-3区においても検出されている。堀の断面は逆台形で、今回検出されている南側の岸においては約45度の勾配を示している。底面はほぼ平坦で深さはもっとも深い部分で当時の地面より70cmである。堀は茶色シルトおよび灰色砂で埋め戻されている。堀から出土している肥前磁器は大橋康二氏のいうⅣ期(1690~1780)のものが中心であることから、幕末期にはすでにこの堀が埋め立てられていた可能性がある。井戸は調査区内において南北140cm、東西40cmで方形を呈する。深さ80cm程度まで人力で掘削したが底が見えないため、埋め戻しに先立って機械掘削を実施したところ深さ2.5mで地山を検出した。摺鉢、染付碗などが遺構中より検出されている。調査区の南側で東西方向に平行して走る2本の溝を検出している。ともに深さ5~10cmの浅い溝であるが、北側の溝1は調査区の途中で途切れ、溝2は調査区の両端を結んでいる。この溝のさらに南側にピット群が存在する。調査区内で見るかぎり明確な規則性はみられず、その性格は不明である。また堀の溝1、2ではさまれた部分にこぶし大の石が集中している部分がある。このうち井戸の付近については特に多くの石がみられる。断面で観察したところこの部分については深さ20cm程度地山を掘削しそこに石混じりの土を入れ替えていたことがわかった。これは地盤の強化や湿気抜きのために行われたものと思われ、この部分には建物が建てられていた可能性が高いだろう。

遺物のうち図化しうるものを図9、図10に示した。1~3は遺構面より上の層を掘削中に検出。1は磁器皿で内面に牡丹の花部分を赤色で、枝部分を染付で描く。色絵の部分も下絵付。藍は鮮やかなコバルトで近代以降の初産と思われる。口径12cm、器高5cm。2は白磁の祭具。台上にのった狐を形象する。内部は空洞である。年代は不詳。頸から上が欠損しており、残存高は7.2cm。3は陶製の鳥型水注で、全体に白磁釉を施す。器高は3.3cm。底部中央と口の下に孔があけられている。4~11は堀の中より出土している。4は肥前系磁器の中皿で口径18.6cm、器高6cm。内面に草花文、見込みに五弁花を描く。外面には簡略化された唐草文。18世紀の所産である。5は磁器の中碗。口径10.8cm、器高6cm。形態は杉型で全体に淡い青磁釉を施す。内外面とも無文である。畿内産で18世紀後半のものと思われる。6は肥前系磁器の蓋物の蓋。つまみ部分は欠損している。口径9.4cm、器高2.2cm。上面には蔓草文を描く。年代不詳。7は肥前系磁器の小皿。口径10.2cm、器高2.6cm。外面に簡略化された唐草文、内面に草花文を染付で描く。厚手で底部高台の接地部分に砂が付着する。18世紀の所産。8は肥前系磁器の猪口。口径5.8cm、器高5.3cm。外面に5枚の葉の文様をコンニャク印判で捺す。18世紀の所産。9は肥前系磁器の皿。口径12.8cm、器高4.9cm。器高が高く、口縁部は端反型。全体にやや青みがかった釉を施す。外面は無文で、内面口縁部分に円画線をまわし、簡略化された雲文を描く。

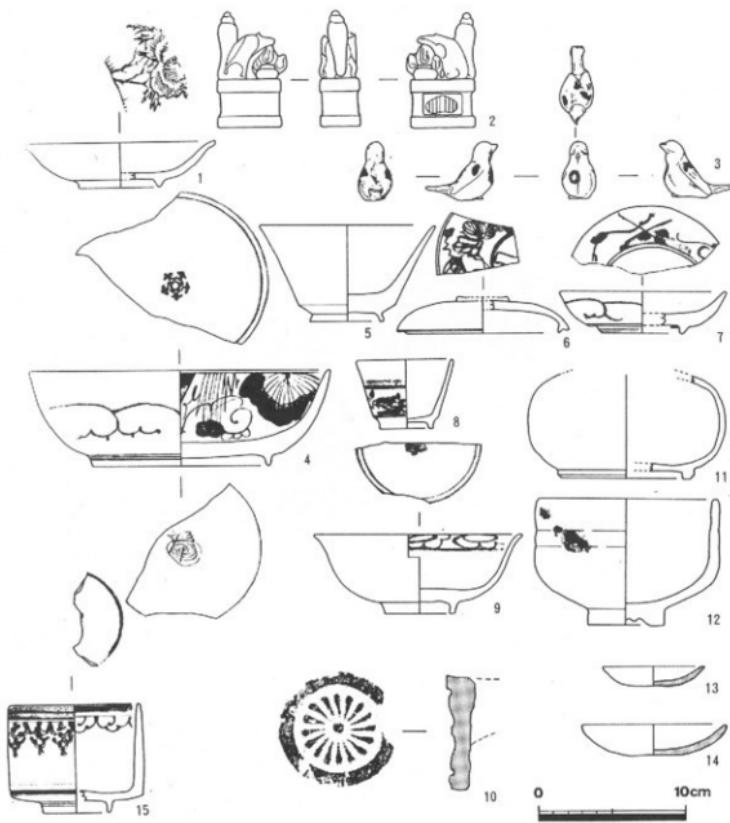


図9 狹山藩陣屋跡 00-2区 出土遺物（1）

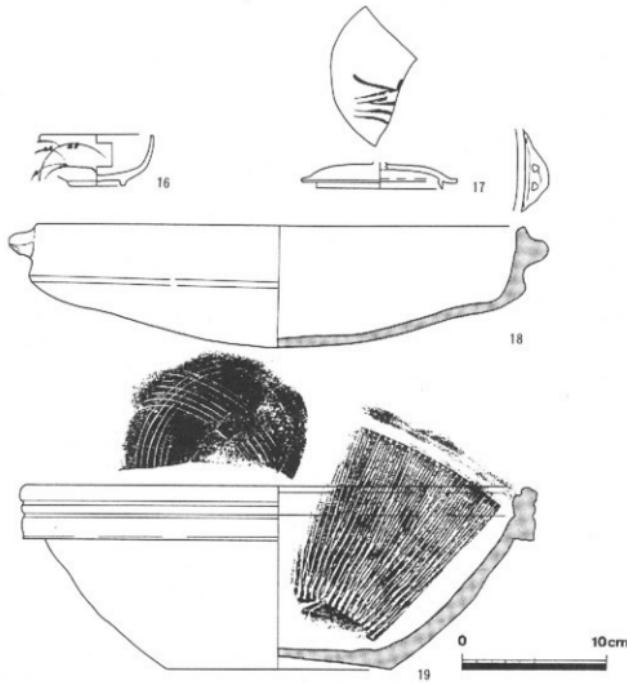


図10 狹山藩陣屋跡 00-2区 出土遺物（2）

内面の底部外周にも二重線をまわし、見込みに五弁花を描く。18世紀の所産。10は瓦の瓦当部分。外は欠損しているが大きさから考えて軒棟瓦と思われる。11は陶器の小型壺。口径不明、器高6.4cm。内外面に鉄軸を施す。ただし底部のみは露胎。上部が欠損しているため全体的な形態は不明確であるが、側面は丸みをおびて中央よりもやや上で肩をもつ。底部高台は削り出し。12～15は造構面の清掃中に出土。産地は丹波か。年代不詳。12は陶器中碗。口径10.8cm 器高7.8cm 腰折れ型で内外面に灰釉を施す。底部は露胎。瀬戸美濃系。13、14は土師皿。13は口径6.2cm 器高1.2cm 14は口径8.8cm 器高1.9cm ともに無釉である。15は肥前系磁器の碗。口径9cm 器高6.8cm 筒型で外面は口縁部を塗り潰しその下に宝輪文繋ぎ、内面は口縁部付近に省略された雲文。見込みに五弁花。18世紀の所産。16～19は井戸より出土。16は肥前系磁器の小碗。口径7cm 器高3.2cm 外面に草花文を描く。18世紀の所産。17は陶器蓋物の蓋。

瀬戸美濃系。口径7.8cm。器高1.7cm。外面には草花を描き、透明釉を施す。内面は露胎。18は
焙烙。口径30cm、器高7.7cm。二つの外耳をもち各耳には二つの孔が穿たれている。底部はや
や丸みを帯びる。堺あるいは在地産と思われる。19は摺鉢。口径32cm。器高11.4cm。内面の櫛
目はほぼ全体に施され、底面は一重に輪をかくように櫛目をまわす。堺産。遺物の様相からこ
の遺構面は18世紀を中心としたものであることが間違いないがなく、それ以前の遺物はほとんどみ
られない。遺構が廃棄された時期の遺物がこの面に多く残されたものと考えられるだろう。

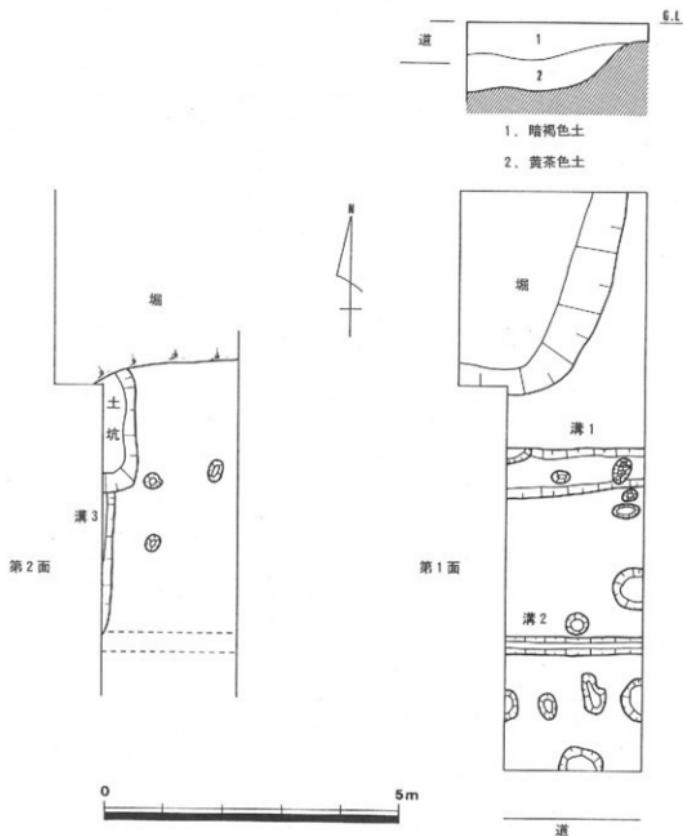


図11 狹山藩陣屋跡00—3区 遺構断面図 ($S=1/80$)

③00-3区

00-2に東接する調査区が00-3区である。この調査区の西端と00-1区の東端とは3mの距離がある。この調査区の北側においても堀が検出されている。堀は調査区の東端には至っていないが、さらに北側には延びている。したがってこの部分での堀の南北幅は最低でも310cm以上である。また00-1区まであわせた堀の東西長さは16.5m以上となる。堀の東端の斜面角度は30度程度で南側斜面の角度よりもやや緩やかである。この部分の堀の深さは約90cm。黄茶色土で埋め立てられている。堀の南側には平行して走る2本の溝がある。溝1は幅80cm 深さ8cm 溝2は幅35cm 深さ10cmともに調査区の東西両端に達している。2本の溝の中心線間距離は280cm 溝1の底面にピットが3つみられるが、これは次に述べる第2面の遺構である可能性がある。溝1と溝2の間、また溝2より南側にもピットがみられるが、後者は東西1列にならぶものの、前者には明瞭な規格性がない。

溝2よりも北側においてはこれまで述べた第1面を8cm下げたところに第2面が存在した。ただし溝2以南ではこれがみられない。第2面では調査区西端で土坑を検出している。この土坑は調査区内においては南北2m、東西52cmで深さは40cmある。また土坑から南側に溝が延びているがこの溝の規模は調査区内において長さ220cm 幅40cm、深さは不明である。また堀の肩は第1面においては調査区の中で北側に屈曲していたが、第2面においては調査区の東端まで延びており、この時期さらに溝は東に延びていたことがわかる。また土坑の東側で3つのピットがみられる。

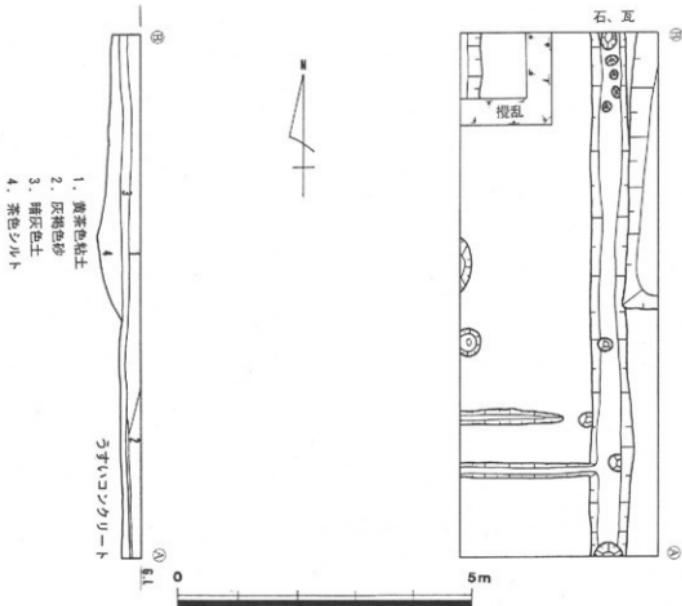


図12 狹山藩陣屋跡00-4区遺構平面面図 ($S=1/80$)

00-3区では年代の明らかな遺物の出土がほとんどないため、遺構の年代は不明であるが、遺構面や遺構自体の連続性から00-2区と同様18世紀を中心とした時代であることは間違いない。ただ、第2面はそれに先行する時期のものである。この時期に堀がより東側に展開していたことには注意すべきであろう。

④00-4区

00-4区は一番東よりの調査区で、建築の規模や基礎の深さを考慮し東西3.2m、南北8.6mについて発掘調査を実施した。現状地盤を25cm削した箇所に薄いコンクリートが貼られており、その下の暗灰色土をさらに掘削したところ12cm下で遺構面に至った。調査区の南側に東西方向の溝がみられるがこれは00-2、-3区でみられたものの延長である可能性が高い。また調査区の東側に北端から南端まで連続する溝が検出された。調査区内における長さ8.6m、幅は60cm、底面にいくつかピットがみられる。またこの溝が埋められてからさらに溝4が掘削されている。溝4は深さ40cm茶色シルトによって埋められている。この調査区からも年代を示す遺物は検出されていないが、やはり遺構面の高さや遺構の連続性から00-2、00-3区と同様に18世紀を中心とした時代のものであると思われる。

⑤00-5区

狭山二丁目に所在する。この場所は上屋敷の南を画していた大手門（南門）のさらに南側にあたっている。予定されている建築物の規模を考慮し、東西、南北とも5mの調査区を設定した。表面から25cm削を行ったところ、黄褐色からなる遺構面を検出した。この

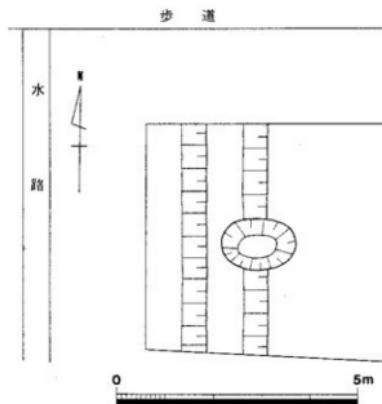


図13 狹山藩陣屋跡00-5区遺構平面図 ($S=1/100$)

面は東側にむかって2段にわたって落ちており上面と最下面では40cm程度の高低差がある。また一段目の部分に南北50cm、東西78cmの土坑が存在する。土坑の深さは35cmであった。遺構全体から遺物はほとんど検出されていないが東側の段の部分で明治10年の年号をもつ1銭硬貨が検出されており、このような段差が埋め立てられて現状のような平面となったのは明治時代のことと思われる。検出された段差はもともとの斜面を畑などの目的で、ある程度削平して作られたものと思われる。調査区のすぐ東側には現在でも水路が存在するが、この水路は東除川から取水した水を陣屋上屋敷の西端に長く延びる御庭池に入れるための水路である。検出された斜面の状況から、この水路もある程度自然の開拓谷などをを利用して作られたものであることがわかる。

⑥00-6区

狭山二丁目に所在する。狭山藩陣屋跡の下屋敷の北端にあたり、敷地の北側には道一本をへだてて東除川が流れている。予定されている建物は現状地盤の上にさらに盛土をして建築されるため、遺構への影響は少ない。そこで地下の遺構の状況を確認する目的で、南北8m、東西6.5m、幅それぞれ60cmのトレーナーを掘削した。その結果ごく最近のものと思われる盛土が現状地盤から25~40cm存在し、そこから20cm掘り下げたところで第1遺構面を検出した。部分的なトレーナーでの調査であったが、土坑状の遺構を計4基検出することができた。いずれも直径1~2mの土坑であるが全体の形態は不明である。深さは土坑1が25cm、土坑2が5cm、土坑3が

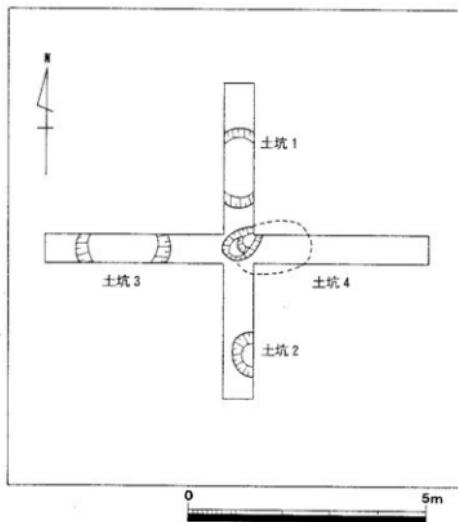
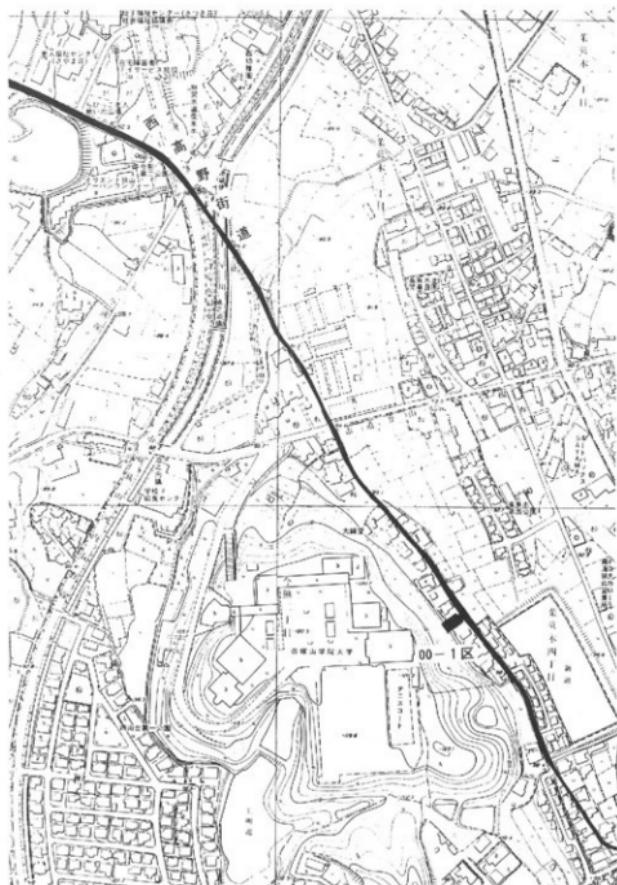


図14 狹山藩陣屋跡00-6区遺構平面図 (S=1/100)



0 200 m

図15 新池遺跡 00-1区調査地位置図 (S = 1/5000)

25cm、土坑4は2段に掘りこまれており深さは最深部で35cmであった。遺物などは遺構からも盛土からも検出されていない。またこれらの遺構の底部においても地山と思われる面は検出されていない。

00-6区の場所を「狭山藩陣屋下屋敷絵図」と照合すると、絵図の縮尺が不定であるため正確は期しがたいものの、おおむね下屋敷の北端に設けられていた門の内側（南側）の広場の位置に相当すると考えられる。ただ今回検出された遺構からは遺物は出土しておらず、その時期は決めがたい。あるいは幕末期の状況を示している「絵図」よりもさらに古い時期の遺構である可能性もある。

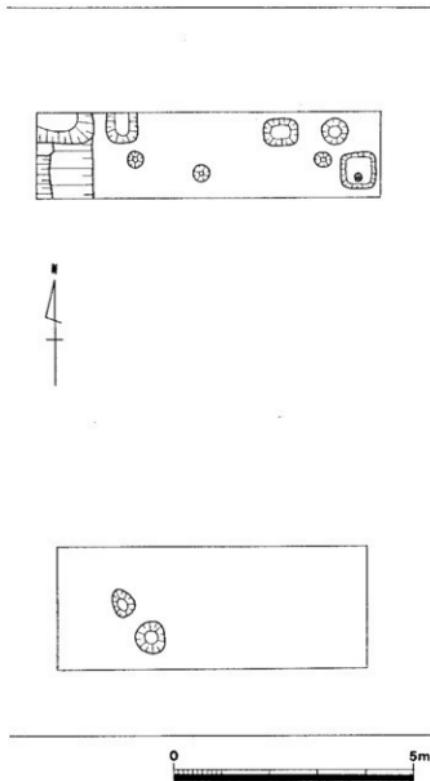


図16 新池遺跡00-1区遺構平面図 (S=1/100)

2. 新池遺跡

①00-1区

今熊二丁目に所在する。この場所は縄文時代の遺物散布地である新池遺跡の一部であるが、陶邑窯跡群にもふくまれ、また西高野街道にも西接している。敷地のすぐ西側は丘陵の切り立った斜面となっており、この斜面では現地の50m南で須恵器窯の存在が確認されている。

調査にあたっては山側（西側）における須恵器窯の存在、また東側における西高野街道関連の遺構の存在を想定し、東西2箇所の調査区を設けた。東側の調査区は南北6.5m、東西2.5mで、現状地盤から20cm下がった場所で遺構面を検出した。調査区の南側において二つのピットを検出した。また西側の調査区は南北6.5m、東西1.8mであるがやはり現状地盤の30cm下で遺構面を検出した。調査区の南端において溝が存在し、その中から須恵器2点が出土している。またそのほかにピット7基が検出されているが、明確な配置をもたず、また遺物も出土していないのでその性格は明確ではない。

3. まとめ

本書に掲載した発掘調査の成果はいずれも小面積の調査であり、その調査独自の成果だけからそれほど多くの情報を得ることは困難である。しかし継続的にこのような調査を続け、調査成果を蓄積し、また互いを比較検討することによって地域の歴史像は次第に明確なものとなっていく。本書に掲載したものの中では、狭山藩陣屋跡遺跡00-2~00-4区は連続した敷地であることから、これらの遺構図面を連続すると、18世紀には陣屋御殿の南側を画する堀が存在し、御殿の南門の前だけは土橋状に掘り残されていたこと、また堀の南側のピットや溝の状況からこの部分にも長屋状の建物が存在したことが明らかになっている。陣屋の平面構造をうかがえる文献資料はきわめて少ないが、今後は発掘成果を蓄積するなかで近世陣屋の構造解明が可能となるかもしれない。

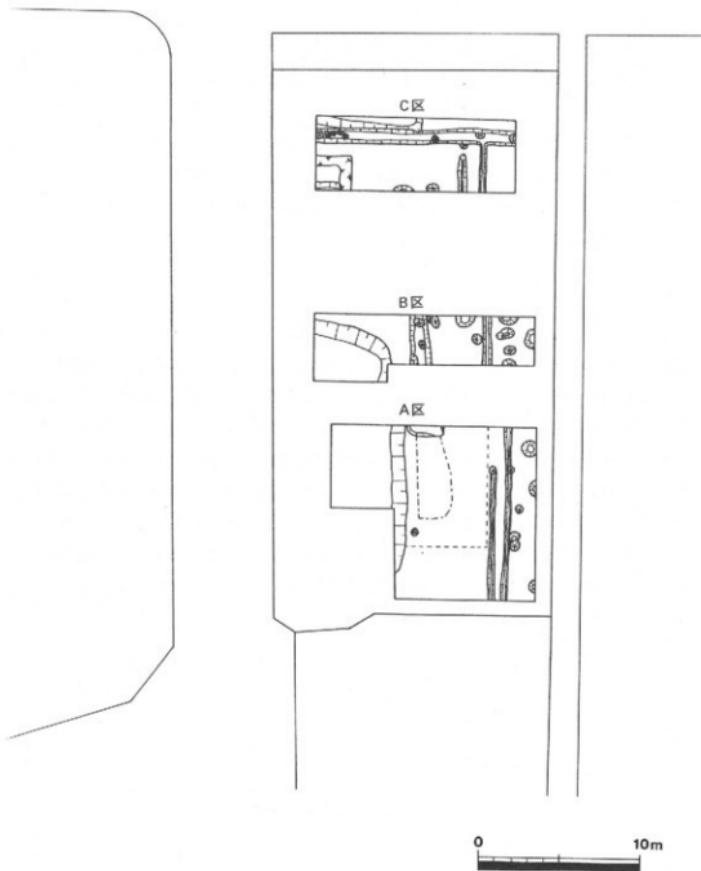


図17 狹山藩陣屋跡00-2、-3、-4区平面図 ($S=1/300$)

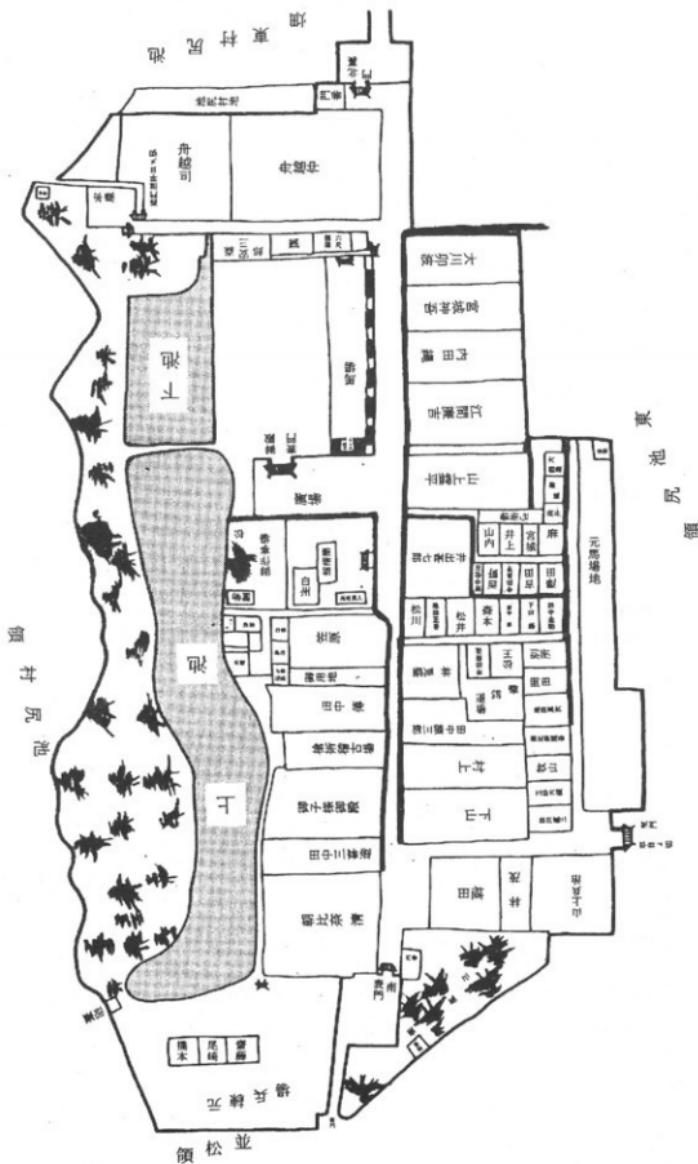


図18 狹山藩陣屋上屋敷絵図（読みおこし図）

報告書抄録

ふりがな	おおさかさやましないいせきぐんはくつちょうさほうこくしょ11					
書名	大阪狭山市内遺跡発掘調査報告書11					
副書名						
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書22					
シリーズ番号	22					
編集機関	大阪狭山市教育委員会					
所在地	大阪狭山市狭山一丁目2384-1					
発行日	西暦2001年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査区	調査面積 (m ²)
さやまはん じんやあと 狭山藩 陣屋跡	おおさかさやまし さやま 大阪府大阪狭山 市狭山	27231	34度 30分 15秒	135度 33分 30秒	00-1	53
					00-2	48
					00-3	18
					00-4	15
					00-5	25
					00-6	8
しんいけ いせき 新池遺跡	おおさかさや ましいまくま 大阪府大阪狭山 市今熊	27231	34度 30分 15秒	135度 33分 30秒	00-1	26
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	
狭山藩 陣屋跡	城館	江戸時代	00-1区:溝、土孔	00-1区:ミニチュアすり鉢、		
			00-2区:溝、井戸、堀	染付皿、急須、花		
			00-3区:堀、溝、土孔	瓶、火舎		
			00-4区:溝	鳥形水注、染付皿、		
			00-5区:落ち込み、 土孔	染付碗、土師小皿、 ホウラク、すり鉢		
			00-6区:土孔			

図 版

図版1
狹山落陸場跡付近航空写真



图版2
狭山藩陣屋跡00—1—区



C区第2面



D区第2面



E区第1面

図版 3
狭山藩陣屋跡 00—1 区



F 区第 2 面



F 区第 1 面



G 区第 2 面



H区第1面



H区第1面



H区第2面

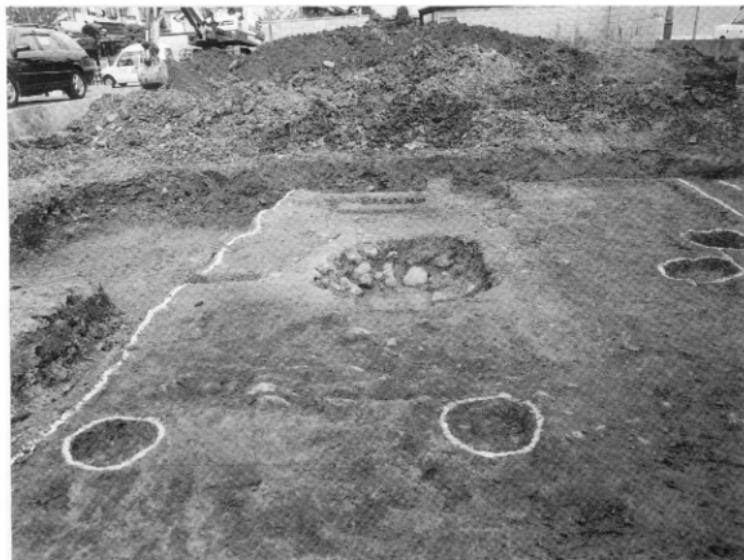


全景（南から）



溝

図版 6
狭山藩陣屋跡 00—2 区



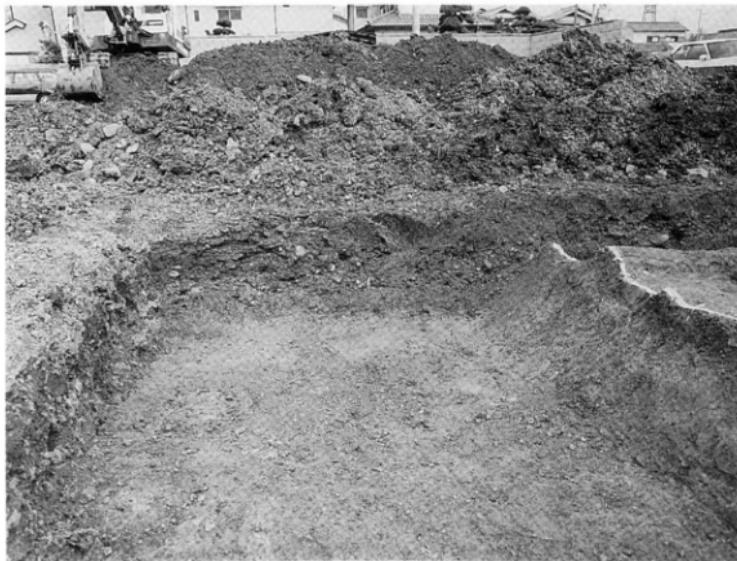
石敷の部分



井戸

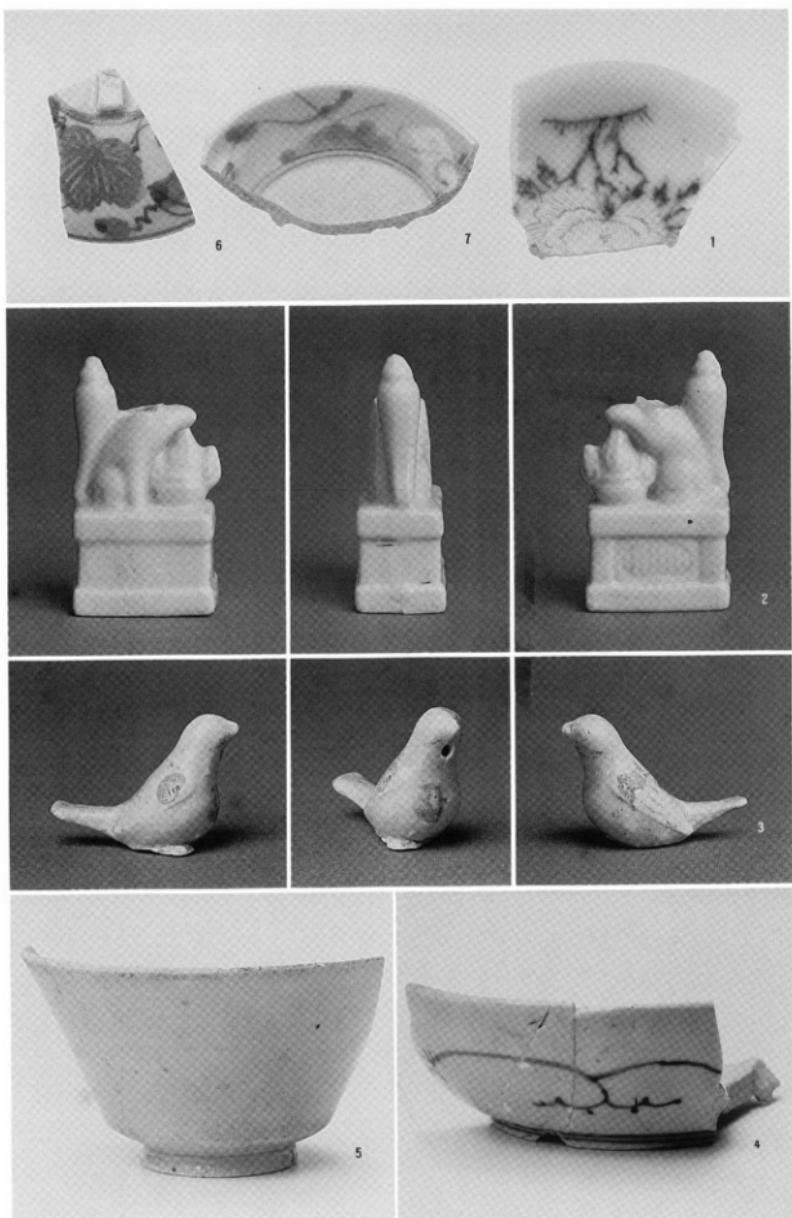


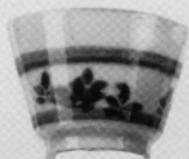
堀



堀の土層断面

図版 8 狹山藩陣屋跡 00—2 区 出土遺物 (1)





8



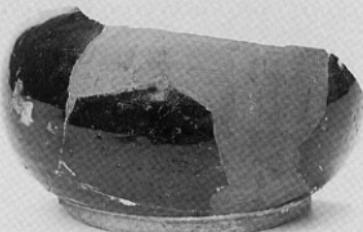
15



9



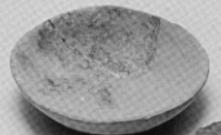
10



11



12



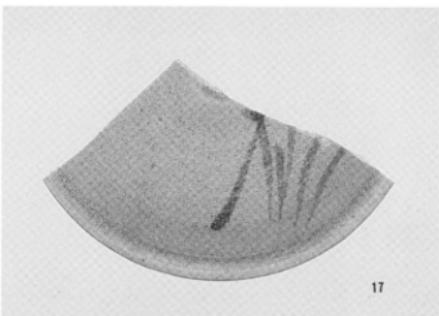
14



13



16



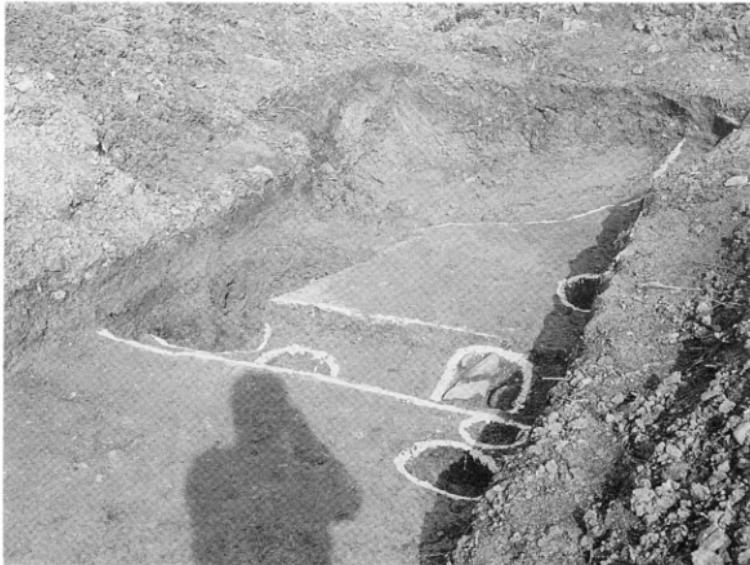
17



18



19



堀



00-2 区に連続する溝



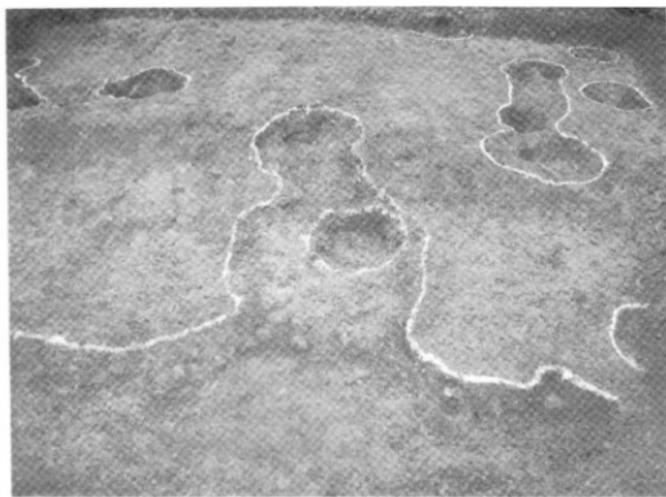
堀



溝・ピット群



遺構全容



土 坑

大阪狭山市文化財報告書22

**大阪狭山市内遺跡群
発掘調査報告書11**

発行日 平成13年(2001年)3月31日

発 行 大阪狭山市教育委員会

印 刷 長 野 印 刷

